

実施日：7月10日（5時間目）	
領域：特別活動	
取組名：スマホ・ケータイ人権教室	
対象：5・6年生	実施場所：体育館
ア ねらい	
<ul style="list-style-type: none"> 正しく情報を取捨選択する必要性や不確定な情報を鵜呑みにする危険性、さらに誤った情報を拡散することで起こる人権侵害について知り、スマホ・ケータイやインターネットの正しい利用方法やルール・マナーの知識を身に付けるだけでなく、児童一人一人の人権意識を高める。 	
イ 指導内容（指導略案）や取組の概要	
事例①「ライオンが逃げ出した」	
<ul style="list-style-type: none"> SNSで「いいね」をたくさんもらおうとするあまり、おもしろおかしく偽の情報をアップしたことでその情報が拡散し、被災地においてパニックを引き起こさせてしまう事案。何がいけなかったのかを考えさせることで、自分の身勝手な行動がたくさんの人の生活を脅かす危険性があること、また自分の言葉には責任を持たなければいけないことを理解させる。 	
事例②「無料のスタンプ」	
<ul style="list-style-type: none"> ある少女が有料のスタンプをたくさん持っている友だちに憧れ、無料でスタンプがもらえるサイトに関わってしまう。無料でもらえるかわりに会員登録で住所を登録する。何度もスタンプをもらう条件がどんどんエスカレートし、性犯罪に巻き込まれてしまう事案。 昨年度の授業の中で課金の深みにはまる危険性について学習しているので、子どもたちは無断で課金することはいけないことであると認識できている。そこで今回は「無料」という言葉に隠された危険について事例を挙げて学んだ。 	
事例③「みんなで花火を見に行っただけ」	
<ul style="list-style-type: none"> 仲良しグループで花火大会を見に行こうという声があった。しかし1人は見たい動画があるから行かないという。当日その1人以外が花火大会に行ったが、ある男子はオンラインゲームをずっとしながら行動したり、ある女子はSNSにアップするためだけにかき氷を買い、アップしてはそのまま捨てたりする行動にグループの仲は不和になっていく事案。 モバイル機器のどこでもいつでも使える利便性に支配されるのではなく、「今は、ここは何をするとき（場所）」なのかをしっかりと判断する事の重要性。また共に過ごす仲間を、相手を思いやることの大切さを理解させる。 	
まとめ	
<ul style="list-style-type: none"> 情報を発信する前に、誰かを不快な思いをさせないか、傷つけないかを考えることやもしトラブルに巻き込まれたときには大人に相談することが大切であること。また、その際には証拠を残すことの重要性を理解させた。そして、何より相手を思いやる心を忘れてはいけないことを伝えた。 	
ウ 連携先：KDDI 兵庫県立大学 たつの市教育委員会	
エ 連携にむけての取組	
<p>昨年度行った授業からさらに発展した内容にしたり、本校の実態や時事的なものに即した事例にしたりするために、事前に打ち合わせを行った。その中でリテラシーの部分だけでなく、必ず相手を大切にすることの大切さを感じ取れる内容になるようお願いした。</p>	
オ 組織的な取組とその点検・評価を行ううえでの工夫点	
<ul style="list-style-type: none"> 授業の事前に生活アンケートを行い、児童のスマホ・ケータイの所有率や使用頻度など児童の実態を把握した。また結果については学年毎にグラフ化し、個別懇談時に保護者の方へ啓発した。 自分の課題として捉えられるように、事例毎にグループやペアでの話し合いの時間を設け、話し合った意見を全体の場で発表し意見の共有を図った。 授業終了後には、スマホやインターネットの利点や危険性についてまとめられたパンフレットを各学級にて配布し、定着のための事後指導と保護者への啓発を図った。 	
カ 評価の方法	
<ul style="list-style-type: none"> 話し合いへの参加の仕方 意見発表 	
キ 成果	
<p>児童にとって、身近な問題を事例として紹介されたため、関心をもって意欲的に考えたり相談したりすることができた。またその中で、相手の立場に立って考えることや、自分が発信することへの責任についても考えることができた。（児童の発表より）</p>	
ク 課題	
<p>児童は今回の取組や各学級での指導の中で、SNSでの情報の取捨選択の重要性や浅慮な情報のアップロード、またネット社会に潜む危険性についてある程度の知識を持つことができています。しかし、学校も機会がある毎に校報や学級通信、懇談などで啓発を行っているものの、子どもに任せっきりになっている家庭は少なくない。今後も学校・家庭・地域で子どもの安全を見守っていくように連携を図っていく。</p>	